

生きるための謎の解明

酒井啓子（さかい・けいこ）

東京外国語大学院総合国際学研究院・教授



地域研究者の軌跡

- ① 生年・出身地……一九五九年、神奈川県（本籍地）
- ② 専門分野・地域……イラク政治研究
- ③ 学歴……東京大学教養学科国際関係論分科卒
- ④ 職歴……アジア経済研究所研究員（二三歳より二四年）、在イラク日本大使館専門調査員（二七歳、三年間）、カイロ・アメリカン大学客員研究員（三六歳、二年）、東京外国語大学教授（四六歳）
- ⑤ 現地滞在経験……イラク（二七歳から三年間、日本大使館専門調査員）、エジプト（三六歳から二年間、カイロ・アメリカン大学客員研究員）
- ⑥ 研究方法……主として文献研究、政党機関誌などの一次資料分析を行うが、九〇年代の二年間で中東、欧米在住のイラク亡命政治家一〇〇人近くに non-structured

メッセージ

（地域）研究者になること、

および第一部「現場の悩み三〇問」を読んで

自分がいつ「地域研究者」になったのかは、今でもわからない。私が研究を始めた頃は、地域研究が学問分野として社会的認知を得てはいなかったからだ。学卒で、しかも国際関係論を齧っただけで研究所に勤務した者にとって「地域研究者」とは何ぞや」が問題ではなく、むしろ「調査か研究か」が同僚との議論の中心だった。つまり、現地の言葉と土地勘を身に着けてカントリリーリスタや政策提言を行う、「調べる」ことに長けた調査員リサーチャーとなるのか、特定地域に関して「調べたこと」を相対化し、人間が生きる世界全体の謎を少しでもわかりたいと考える研究者スカラとなるのか、という議論である。

その議論は、第一部「現場の悩み三〇問」で交わされた「地域研究か理論研究か」の議論に近いものかもしれない。しかし、三〇年前に比べて違和感を感じるのは、今の議論では研究業を生業にすることが前提とされ、「地域研究か理論研究か」の模索が業種の問題のように見えることである。自分が中東研究を目指したとき、職業としての「研究者」になりたいとは考えていなかった。わからない謎をわかるために、事実を調べたり事実を理解する枠組みを学び続けた結果、今私は「研究者」と呼ばれているだけだ。現地社会

ンタビューやオーラルヒストリー聞きとりを実施。とくに政党事務所などを長時間訪問しての参与観察は政治エリート分析に有効。

⑦ 所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本比較政治学会

⑧ 研究上の画期……三年間のイラク滞在とその後の湾岸戦争。外国人研究者が現地社会に入り込むことで、接する人々に「外国の手先」の嫌疑をかけることになるという冷徹な事実、研究者としてどう対応するか、また研究者が戦争を止められないばかりか、戦争を材料に研究上の名声を得る「死の商人」であるという現実に向き合うかという深刻な課題を以降背負い続けることになる。

⑨ 推薦図書……酒井啓子『イラクは食べる——革命と日常の風景』（岩波新書、二〇〇八年）

をよくしたいと働く政治家や実務家になれるほど、知りえたことを簡単に政策や実務に反映できる能力もなかったし。

そしてある地域のある現象に触れて抱いた謎を追い続けた結果、インターデイシプリナリーにならざるをえなかった者が、「地域研究者」なのではないか。ある地域を研究対象とするのは、そこで触れた社会の在り方、人の結ばれ方のなかに、自分が人間として抱えてきた人生の謎を垣間見たからではないかと思っている。私にとってその謎は「人はいつ、なぜ他者と共感し、なぜ他者を排除するのか」であり、その問題を最も激しくアンプリファイして提供してくれたのが、中東の諸社会だった。

だから私にとっての地域研究は、どこか高みから見下ろす他者研究ではなく、ただ自分が生きていくための謎解明の作業である。

地域研究の魅力と可能性

英国のバンド The The の楽曲に、If you cannot change the world, change yourself と何度も繰り返した最後は、And if you cannot change yourself then...change the world と歌う歌詞がある。どんな既存のデイシプリンも欧米中心視点もグローバル化も自分の抱えた謎を解けないとき、そしてその解の片鱗が世界の辺境のどこかにあると発見したとき、そこから世界を換骨奪胎するのが地域研究なのだ。